秋田県聴覚・言語障害教育研究会OB会
会報 第4号　平成 14年 12月 11 日

標題は、秋田県ことばを育てる親の会
会長　辻 久視　先生の「書」です。
「たんたん」と読みます。
命名者は元OB会事務局長遠藤昌夫先生です。

「たんたん」の意味するところは
《水を深くたたえられた湖へ木漏れ日が鋭く射し込んでいる。重量感溢れる一幅の絵》を創造しております。（遠藤昌夫先生）
なお今回、親の会会長 辻先生からも「たんたん」の意味についてのご寄稿がありました。
詳しくは会報第1号に載っています。

挨拶

「ＯＢ会の在り方を考えよう」

秋田県聴覚・言語障害教育研究会ＯＢ会
会長　伊藤　薫

このたび、県聴覚・言語障害教育研究会が30周年という大きな節目を迎えられたことに対し、心からお祝い申し上げます。
平素より現職会員一人一人の真摯な研究態度には、心から敬意を表するものでありますが、一方、聴・言教育が年々充実し、成果を高めているとするならば、その研修態勢の背景にある支援団体の存在をお互いに忘れてはならないと思っております。
時が流れ、近年特殊教育は、「ノーマライゼーション」の理念の実現に向かってのさまざまな取り組みを進めているのが現状でありますし、また今年度は教育改革元年にもあたることから、これを機に、ＯＢ会のこれまでの在り方をふりかえり、そして今後どんな形での“支援が可能なのか”等について現職会員、ＯＢ会員それぞれの立場から忌たんのないご意見をお聞かせいただければ幸いと思っております。
会員の皆様、日増しに寒くなる季節柄、ご自愛なされますよう念じております。

「潭潭」に寄せて

秋田県ことばを育てる親の会
会長　辻　久視

「潭」とは淵の深さを表すことばですが、更に「たんたん」となると澄み切った心の姿を表現することばで、流石遠藤先生らしき命名と感服いたした次第。

ところで禅語に「月は潭底を穿て水に痕なし」ということばがある。意味は「無心の水月が潭に映じて、然も全く痕跡を残さぬ悟人の心境を言う。」としたもので、この様な人生を生きられたら素晴らしいのですが、「潭潭」も正にその意を指しているといえましょう。

いろいろ苦労精進の果てに行き着いた境遇でＯＢ会の会員の心にふさわしき命名でした。

会報が四号まで来たぞ

秋田県聴覚・言語障害教育研究会ＯＢ会
副会長　梅田　信彦

今年度の会報も四号を迎えました。

編集を担当されている山田先生の御苦労に心から感謝いたします。

今、私が一番楽しみにしているのは「メモリアルホール」です。山田先生一流の発想がズバリ的中した観があります。教室での仕事を終えられた先生たちが、かつての仕事にどんな思いを寄せられておられ、またそれが現在の生活の中にどんな姿をとどめているのかが分かって、懐かしくも嬉しい限りです。

ＯＢ会を結成した当初はこの会の方向性等よく理解し難いところもありましたが、これでこの会の意味が明確になってきたと思っています。通級教室という制度の変更の中で孤軍奮戦しておられる担任の先生や、ことばの問題に悩む子どもたちを幾分かでも私どもの手で支援できればと思うのです。

これからも会員の皆様の一層の輪の拡がりと、ご助力をお願いする次第です。

秋田県聴覚・言語障害教育研究会

30周年記念講演・式典・祝賀会

平成14年11月22日、秋田市内イヤタカを会場に標記30周年記念式典が開かれました。その概要をお知らせいたします。　　（氏名 敬称 略）

【 記念講演】（14：30～15：40）

講師　全国言語障害児をもつ親の会事務局長　野 木　孝

演題　「今、難聴・言語障害教育に求められるもの」

※ 要旨は会報3号でお渡しした「障害のある子の家庭における養育の在り方」に類似、重複しておりますので、省略いたします。会報第3号を参照下さい

【 記念式典 】（16：00～17：00）

挨拶　① 秋田県聴覚言語障害教育研究会　会長 鈴木 正孝

祝辞　① 秋田県聴覚・言語障害教育研究会ＯＢ会 会長 伊藤 薫

② 秋田県言語障害児教育推進協議会 会長 辻 久視

感謝状贈呈

① 秋田県聴覚・言語障害教育研究会より

受賞者（50音順）《 ※ 30周年記念表彰規定による 》

・秋林 武・池田 健 ・伊藤 薫 ・梅田 信彦 ・遠藤 昌夫

・角屋 孝子・・小松 章 ・斎藤 陽子 ・佐藤 泰子・ 辻 久視

・長門 章・仲野谷 清 ・能美 暉一 ・松橋 英雄 ・村木千代子

・山城 正幸 ・山田 芳男

② 秋田県言語障害児教育推進協議会より

・梅田 信彦　　・遠藤 昌夫　　・山田 芳男

③ 受賞者挨拶

受賞者6名から30年を経た現在の想い、あるいは当時の思い出、そして感謝の気持ち等が述べられました。

【祝賀会】（17：30～19：30）

挨拶 ①秋田県聴覚・言語障害教育研究会 会長　鈴木 正孝

祝辞 ①秋田県教育研究会特殊教育部会　会長　武石 正夫

乾杯 ①秋田県聴覚・言語障害教育研究会 前会長 千葉　昭

懇談

乾杯 ①秋田県聴覚・言語障害教育研究会 副会長 田村　栄

※ 約2時間にわたり現職員とＯＢ会会員と、ともども楽しい和やかな懇談会で盛会のうちに終了いたしました。

【30周年記念関連事業】

① 第30回秋田県聴覚・言語障害教育研究大会 2002年7月30日～31日

② 30周年記念誌発行　2002年11月22日

この度 30周年記念誌が発行されました。この主な内容は、

i 当会の30年の沿革(30年のあゆみ)

ii 永年、言語障害児教育にとりくまれた方々の回顧録
(30年の重みを感じさせられる記録であります。)

iii 全県の難聴学級・通級指導教室の実態と教室の歴代担当者一覧

等で構成され読むものに感動を与える素晴らしい記念誌であります。

《 30周年 記念誌 の中から 》

秋田県聴覚・言語障害教育研究会沿革(三十年のあゆみ)
～教室開設年度を抽出～

昭和41年	秋田市立旭南小	ことばの教室開設
昭和42年	能代市立渟城第二小	ことばの教室開設
昭和43年	横手市立朝倉小	ことばの教室開設
昭和44年	鹿角市立花輪小	ことばの教室開設
昭和45年	本荘市立鶴舞小	ことばの教室開設
	第1回秋田県「ことばの教室」担当教員研究会(11月)	
昭和46年	秋田県言語障害教育研究会発足	
	大曲市立花館小	ことばの教室開設
	鷹巣町立鷹巣小	ことばの教室開設
昭和47年	秋田市立土崎小	ことばの教室開設
	大館市立桂城小	ことばの教室開設
	湯沢市立湯沢西小	ことばの教室開設
昭和48年	男鹿市立船川第一小	ことばの教室開設
	角館町立角館西小	ことばの教室開設
昭和50年	西仙北町立大沢郷小	ことばの教室開設
昭和51年	大曲市立花館小	きこえの教室開設
	本荘市立鶴舞小	きこえの教室開設
昭和52年	大館市立桂城小	きこえの教室開設
	鷹巣町立鷹巣小	きこえの教室開設
昭和53年	象潟町立象潟小	ことばの教室開設
昭和55年	雄勝町立横堀小	ことばの教室開設
	秋田市立土崎小	きこえの教室開設
昭和56年	横手市立横手北小	きこえの教室開設
	能代市立渟城第二小	きこえの教室開設

昭和57年	森吉町立米内沢小	ことばの教室開設
	横手市立朝倉小	きこえの教室移設(横手北小から)
昭和63年	田沢湖町立神代小	ことばの教室開設
平成 2年	第19回全国公立学校難聴・言語障害研究協議会全国大会	
	秋田大会	
平成 4年	秋田市立日新小	きこえの教室開設
平成 5年	八竜町立浜口小	きこえの教室開設
	大館市立花岡中	きこえの教室開設
平成 7年	西目町立西目小	きこえの教室開設
平成 9年	二ツ井町立二ツ井中	きこえの教室開設
	八竜町立八竜中	きこえの教室開設
	大曲市立大曲西中	きこえの教室開設
平成10年	羽後町立元西小	きこえの教室開設
	西目町立西目中	きこえの教室開設
	鷹巣町立鷹巣中	きこえの教室開設
	秋田市立桜小	きこえの教室開設
平成11年	天王町立天王小	きこえの教室開設
	皆瀬村立皆瀬小	きこえの教室開設
平成12年	鹿角市立八幡平小	きこえの教室開設
	八森町立観海小	きこえの教室開設
	雄勝町立横掘小	きこえの教室開設
	本荘市立南中	きこえの教室開設
	秋田市立秋田西中	きこえの教室開設
平成13年	秋田市立大住小	きこえの教室開設
平成14年	第30回秋田県聴覚・言語障害教育研究会開催	
	秋田県聴覚・言語障害教育研究会30周年記念式典	

☆限られた資料の中でまとめました。不明な点や誤った記述があるかと思います。ご容赦の程お願いいたします。

③「秋田のきこえとことば」と題した分厚い冊子も発行しております。
これには全県の各教室の実践研究が載っております。
事例、検査、調査報告、指導の実際などが記録されています。

《特別寄稿》

難聴学級の現状

秋田市　　石井辰徳

近年、難聴児童の就学において地元小学校を希望する例が際立って多くなってきている。これは全国的な傾向であり、聾学校の存続の問題や、聾学校としての機能の見直しの問題にまで発展している。秋田聾学校の場合も、十数年前までは幼稚部を終了すると、そのまま小学部に入学するのが普通であったが、最近は、子供の言語力の如何を問わず地元の小学校に就学するケースが多くなってきている。

このような状況の中で秋田県の難聴学級の数は年々増えてきている。本年度の学級数は小学校13学級、中学校4学級、計17学級である。また、児童生徒数は、小学校17名、中学校4名、計21名である。この他、通常学級に、難聴があり障害の状態や学習状況から見て特別な指導が必要であると思われる児童生徒が、現在分かっているだけでも7名程在籍している。

障害の程度・状態は様々である。聴力レベルが60dB台の中等度難聴から100dB以上の重度難聴までおり、また、知的障害を合わせ持った重複障害児もいる。更には人工内耳をつけた子供も3名いる。(通常学級在籍者を含む)

また、コミュニケーションの方法も、聴覚口話だけで可能な子供から、聴覚と読話併用の子供、主として身振り・手話による子供と、これまた多様である。

そして、この障害等の多様さは、学習能力・学習進度の格差につながっている。小学校高学年になっても教科学習に入れないでいる子供から、通常学級の子供と同じように学年相当の学習を行っている子供までいる。

こうした多様な状況の中で、一人一人の子供の障害・能力に合った適切な指導を行い、順調に教育成果を上げて行くためには、教師の高い指導力が求められるが、これについては、大変に心配な状況にある。かねてより、難聴教育はその難しさから「10年経験して一人前」と言われてきている教育である。本年度の難聴学級担任の経験年数を見るに、難聴学級担任1年目の教諭が6名、2年目の教諭が5名、3年から5年目の教諭が6名である。幸いにも臨時講師はおらず、また、一生懸命な教師が多いが、それにしてもあまりにも経験年数が少ないと言わざるを得ない。そのために、担任の研修機会を多くしようと、聾学校職員と協力しながら学校訪問を繰り返しているところである。

なお、本年度から3年間、聾学校が県教育委員会より「盲・聾・養護学校のセンター的機能の充実に関する調査研究」の委嘱を受けており、来年度は難聴学級への支援活動を一層拡充させるために、校内組織の見直しを検討しているところである。

「ことばの教室」「きこえの教室」

創設期の回想の記

☆今年度は県聴覚・言語障害教育研究会設立30周年にあたります。この記念すべき年にちなんで、教室の開設に当たった各位から、開設当時の心に残っている数々の思い出を記してもらいました。　（原稿到着順）

教師くささを取る

河辺町　　高橋恒治

昭和50年、難聴学級開設準備にあたり研修でお世話になった指導教官の口癖が、標題の「教師くささ・・・」です。

花館小学校に難聴学級が開設されることになり、前の年の1年間、宮城教育大・言語障害児教育教員養成・現職課程に籍を置きました。現職対象の課程は50年度新設のほやほやで、それまでの研修生は自由だったのに、32単位の取得が課せられました。実は、障害児教育にかかわろうとする現職者の研修にとって重要なのは、単位取得に精力を向けるのではなく、これまで身につけてしまった教師くささを取ることだったのです。

教師くささが取れたかどうか分からないまま、研修を終えた昭和51年4月、既に開設されていた花館小学校「ことばの教室」の中で仕事を始めました。専用教室は12月、増設された教室棟の中に完成しました。

「きこえの教室」開設に当たって、関係者には大変よくしてもらいました。

① 県単の教室開設で、備品費など他県の先進校に比べると少なかったが、施設への要望は十分受け入れられた。通級児童に便利な一番よい場所で、防音対策にも満足できた。しかし、エアコンだけは認められず。

② 学生のような1年間の研修ではほとんど分からず、現場に戻った年に、実技研修のため6回ほど、県立聾学校に出かけることも認めてもらった。そこで、当時同じく鶴舞小に開設した菅原先生や、聾学校教育の先達の方々にお目にかかれ、本当に多くのことを学んだ。

障害児教育は「指導」でなく、「支援」に重きが置かれています。27年前の指導教官の指摘、先見性はさすがです。

盲、聾、養護学校とは違い、小、中学校設置の特殊学級や教室の意義は、障害のある子どもたちのためのみにあるのではなく、設置校に在籍する子どもたちのことばの力が高まり、傾聴態度がよくなることにつながらなければならないという同じ指導教官からの教えもあり、このことは実現できなかったことの一つとして今でも心残りとなっています。

未知との遭遇の思い出

能代市　塚本　寿之

昭和54年、担当学級に吃音の子がいて、「渟城二小ことばの教室」に通級していた。担任者会で初めて言語治療教育を知り興味をもった。

年度末近くになって、渟城二小ことばの教室創設者で県特殊教育センターに勤務しておられた山田芳男先生に「ことばの教室へこないか」と声をかけられ思いきって承諾した。

だが、難聴学級担当だと言われて困った。まったくの未知の分野であったからだ。ただ、救われたことは1年間研修で秋大へ内地留学できるという市教育委員会の配慮だった。

喜んだが、大学の講義に聴覚障害は皆無であった。故中村四郎教授が週1日聾学校での研修を段取りしてくださったので助かった。

40歳になってからの秋田市への通学はきつかった。帰途は必ず途中で下車して眠った。付属養護学校での教育実習の2週間は学校近くのビジネスホテルに宿泊し通学した。

聾学校では池田教頭先生、石井柳次先生、石井 辰徳先生に大変お世話になり、研修が実りあるものに変わっていった。

56年4月渟城二小に「きこえの教室」が創設された。「ことばの教室」の梅田信彦先生が援護して下さるので心強かった。能代市では国際障害者年とあって1200万円の難聴教育指導機器購入費を予算化され聾学校にある指導機器の準備ができ感謝感激した。

通級生は7名で聾学校からの転校生2名が含まれた。言葉を全く有しない3歳児に出会い指導に苦労したことが忘れられない。

「かたむし」の思い出

鷹巣町　平田　謙一

昭和54年4月、梅田信彦先生の後を受け継いだ「ことばの教室」。言語治療という言葉が心に重く〃のしかかっていた頃でした。

つゆの季節のある朝、ちえ遅れを伴った重複障害の子供が、かたつむりを数匹持ってきて、「"カタムシ"とった」と話しかけてきました。いくらかのことばは話せるようになっていた子供でした。

しばらく一緒に眺めました。乾いた板の上をはわせてみたり、大きいかたつむりの上に小さいのを乗せてみたり、水で濡らした板の上をはわせてみたり、濡れた雑巾の上をはわせたりして楽しみました。

かなり遊んだ後、私は、またたずねてみました。その子は"カタムシ"といいます。そこで"かたつむり"と何度か教えました。板書もしました。

するとその子はノートを出して「かたつむり」と書いていました。そして一字一字「かたつむり」と読みはじめました。それから何日かして"とうとう"『かたつむり』と言えるようになったのです。どうして言えるようになったのかよく分からない心もとない教師でした。いまだによく分かりません。もしかして自然認識を中心とした学習の誕生だったのでは？といったら笑われるでしょうね。

懐かしい思い出のつまった鷹巣小学校ことばの教室の8年間でした。

このごろ、孫に「くそじじい」と言われながらも、ことばの指導におぼれている昨今です。

石井興太郎先生

本荘市　遠藤　昌夫

石井先生との出会いは、辻会長のご紹介で昭和41年のことですから、35年も前のことです。第一印象としては、とても温かなお人柄で眼鏡がよくお似合いの、おそらく、校長退職3～4年ぐらいのお方と感じました。

私達のことばの教室運営については寸暇を惜しまず助言して下さり、何よりも力づけて下さる頼もしい大先輩でした。辻会長からお伺いしましたところ、石井先生はご自分の吃音をご自分で研究努力なさり見事に克服され、それ以後、ご自分と同じ悩みを持った吃音者達への親身な対応をなさったのだそうです。

ご退職と同時に県の社会福祉協議会の一室を言語障害で悩んでいる方々の為の相談室を開設されボランテアとして相談員をお引き受けになられました。

そんなことで、一緒にお酒を飲み語り合いニコニコなさりながら私達の希望を前向きに受け止め、その一つが現在も続いている県言語障害教育推進協議会です。私達の仕事に関連する総ての社会的環境を整える為のものでした。

また、私達の指導内容についてですが、当時、私達はバンライパーを崇敬しておりましたので、民間療法を排斥する立場をとっておりましたが、石井先生は、「一人一人いろいろだからね。」と温かい目で話してくれました。

その価値がうすうすと分かりかけたのは先生がお亡くなりになった後でした。この仕事に携わる私達にとって、先生は偉大な大先輩なのです。しかも、ことばの教室が開設された昭和42年より相当前からの大先人だったのです。

教科書のこと

能代市　山田　芳男

昭和41年に初めて「言語障害」という言葉を耳にしました。言語障害児教育を推進するため東北大学へ留学せよとのお達しであります。言語障害って何だ？。少しは予備知識が無いと具合が悪いんじゃないですか。と思って書店に足を運びました。ところが言語障害に関する書籍はただの一冊もありません。秋田市の書店にも行きましたが、ここにもありません。言語障害とは何か、皆目見当もつかないままに、仙台に赴きました。

エーイ、ママヨ、ナントカナルダロウ、と半ばやけっぱちな気持ちで、しかも不安感一杯で、気持ちにかなりのストレスが溜まっていました。東北大に聴覚言語欠陥学研究室というものものしい名前の研究室があります。右も左もわからない私が、おそるおそるその研究室へ足をふみいれたのは5月のことでした。

とにかく何か手掛かりになるものはないか、本はないか、探しに探して手に入れたのが、①「音声言語病理学」～エドワードトラビス著～(昭和39年7月発刊) ②「言語病理学診断法」～ウエンデルジョンソン著(昭和40年8月発刊)の二冊でした。教育書を読み慣れてきた者にとっては全く異なる世界の本で、まるで医学書の感じです。この本を読むにはかなりの抵抗感がありましたが、この本で初めて言語障害の種別、あるいは成育歴調査、言語障害の検査法等おぼろげながら言語障害の輪郭が見え始めました。翌、昭和42年淳城第二小学校に「ことばの教室」が開設されました。ここでまた新しい教科書が現れました。それが、黒表紙の装丁で有名な③「ことばの治療ースピーチコレクションー」～チャールズ・V・ライパー著～であります。言語障害児への具体的な治療法の書かれた本です。この本に則って言語治療が開始されたのでした。続いてようやく、日本版の書物が出版されました。④「言語障害治療学」～田口恒夫著～(昭和41年8月発刊)と ⑤「吃音研究ハンドブック」～神山五郎著～(昭和42年6月発刊)であります。これ以後は続々と言語障害にかかわる書籍が出版されるに至ったのでした。

この5冊は私の進むべき道を決定させた貴重な教科書として書架に大切に保管されています。

「理解を求めて」

秋田市　長門　章

聾学校に勤務していた私に、今度土崎小学校に「きこえの教室」ができるので、やってみないかと校長に言われた。当時聾学校は普通校と交流をし

ていたが、その相手校が土崎小学校であったし、私が何かの役に立てばという気持ちもあったのでお引き受けした。
「きこえの教室」という言葉はなじみが薄く、現に私自身も初めて聞く言葉であった。
普通学級の先生からは、どんな勉強をするのかなどの質問が相次いだ。一般的に耳が聞こえない子供は、聾学校へ行けばよい。耳が遠いお年寄りは大きい声で話せばよいし補聴器をつければ用が足りるという知識しか持ち合わせていなかった。難聴児の実態を理解してもらうには相当な距離があった。
また通級児全員が他校の児童なので放課後にやってくる。従って午前中は教材研究の時間であり、コピーをとるため職員室にも顔を出す。すると他の先生方の目につくことになる。いつ指導しているんだろうという声も遠回しに聞こえてくる。そこで教室に引きこもりがちになってしまう。孤立化のはじまりである。この雰囲気を感じたのか特学部主任の提案で午前中は花壇の整備や花苗の植え付けの段取りをしたり、先生方の負担を軽減することに努めた。その後飼育栽培部をまかされたが、児童の活動の時間には通級児の指導の時間と重なり、やり繰りが大変だった。しかし、それが功を奏したのか、教室に理解を示してくれるようになった。

「ことばの教室」誕生

中仙町　仲野谷　清

退職して13年目になり記憶が薄れるどころか脳から消え失せてしまいましたので・・・　角館西小「ことばの教室」に電話をしました。
当時一緒に仕事をしていた小西先生に沿革を記してもらっていましたので、それを保存しているかどうか聞いたところあるとのことでした。
それを抜粋して記します。
(1)　昭和47年度
角館小学校に「ことばの教室」が設置されるとの事で小西先生が花館小学校「ことばの教室」に研修生として勤務する。
昭和48年2月、花館小「ことばの教室」の3名の先生が角館小児童全員の発音調査をする。
(2)　昭和48年度
大曲小から仲野谷が転入して小西先生と2名で「ことばの教室」を担当する。その年度に統合小学校の計画が具体化されており「ことばの教室」は二階の端の教室で廊下も含めてベニヤ板で仕切って指導室2、職員室、プレールーム、待合室等の仮り住まいとして発足する。
本校児童11名の構音に問題のある児童を二学期から指導しながら町内の小学校4校の児童(2年生～5年生)全員の「ことば」の検査をする。更に

町内の幼稚園、保育園児の構音調査、構音に問題のある児の指導をする。さらに要望に応えて知能検査も実施する。
また、新校舎の「ことばの教室」の設計の参画にもあたる。新校舎には玄関・待合室(和室)・指導室 2・検査室・資料室・プレールーム・職員室等 7部屋の教室となる

開級てんやわんや

能代市　　梅田　信彦

開級について多少の不安はあっても困惑はなかった。渟二小の山田先生からは、検査、指導に関する膨大な資料を根こそぎ貰ってきたし、鶴舞小の遠藤先生からは虎の子の診断資料を盗み同然に頂戴してきたし、自分で選び入手した27冊の本は全部読み終え、自己流の検査、診断法を「理屈」の上では「確立」したし、検査、指導の用具、絵カード、用紙、玩具、絵本等々は町から多額の予算を戴いて揃えたし、ーーでーー用意万端整えた。
昭和46年7月上旬、入級者決定のために希望者約30名の検査に、小沢正子先生と二人で取り掛かった。阿仁、上小阿仁、森吉、合川、鷹巣から集まった。中には、バス、汽車を乗り継いで一日がかりで来る子どももいた。
検査は一週間で終えた。
小沢先生は晴れやかな声で悲鳴をあげた。「スカートが脱げて来るわ。」
小沢先生の堂々たる体くが細く見えた。私も食欲不振で5K減った。
9月、指導開始。構音障害、口蓋裂、脳性まひ、言語発達遅滞、吃音、かん黙、難聴と全て網羅した。
それぞれの問題に適切に対処するにはどうしたらよいか。具体的な対処を迫られたがその方策は無かった。しかし、子どもは通って来る。苦肉の策で、当分の間は「ラポートづくり」のため「遊ぶ」ことにした。
これは我ながら「良策」であった。
子どもと一対一で「真剣」に遊んでいるうちに、少しずつ問題の中核が見えてきた。
何をしたのかよく分からぬまゝ、冬が来る前に、構音障害の数名が退級した。
どうして直ったのか、不思議だった
とにもかくにも、開級初年度はあっという間に過ぎた。
小沢先生の「翼状せん」が悪化し、私の背中の仙痛が増して、胆石症の疑いが残った。

OB会メモリアルホール

仏像を彫る

本荘市笹道　　遠藤　昌夫

仏像に憧れて最初に聖観音お身丈３０cm程を彫り上げてからもう30年にもなる。
一年に一体ずつ彫ったとしても30体にもなるのですが、残っているのは16体、お寺で消失したのものが2体、所在がはっきりしているものが7体、後の5体は何処のことやら。
現在は身丈70cm程の阿修羅像を彫っている。阿修羅は闘争的で守護神でもあるが、人間以下で餓鬼・畜生・修羅とした一面ももっている。まさに私とぴったりの仏像なので一日2時間ずつ彫っているが、30年のベテランのはずがとんでもない間違いや失敗を繰り返している。
その一つ、こんな刃物の持ちかたをしては必ず怪我をすると思いながら手を削る。
その二は、もっともっとと小さなところをいじくりまわして、部分的に痩せられてしまう。そうなると全体を修正しなければならない等々。
まさに集中力を欠いた微視眼的な存在、70という年齢のせいか。
いつの日か温泉にでも入って会員の皆様と一緒に仏像を彫る会などの企画もいいな、なんて思っています。

「あれから・その後」

本荘市田町　　鈴木　憲一

平成元年、県内でも不登校児童生徒の問題が顕在化し始め、校長会でも話題になった。
平成3年、市内の医師と教師の有志数名で不登校問題研究会(羊の会)を立ちあげた。私達発起人の呼び掛けに医療・教育関係者が20数名賛同していただいた。それ以来月例会は第一水曜午後6時から市内第一病院で開催し、現在も休会することなく続けられている。例会は、ケース研究だけでなく、年に1～2回は講師を招いての講義、そして年に1回は公開フォーラム「不登校を考える集い」を実施している。この夏は第9回のフォーラムを開催したが、参加者76名、個別相談11名、講演ともども好評のうちに終了した。
平成5年4月、定年退職と同時に本荘市教育委員会が独自に開設した不登校児童生徒のための「適応指導教室(ふれあい教室)」の相談・指導員を命ぜられ、それから満5年間その子等と付き合ったし、学ばせられた。

平成9年、その教室を後任者に引き継いだら直ちに県教育委員会より「本荘由利地区特殊教育地域センター特殊教育指導員」を拝命今日に至っている。地域センターは昭和57年鶴舞小学校特学担任時代に兼務でしたので、かつての古巣に帰ったことになり、これも又5年目を終えようとしている。

地域センターは、障害児の療育・教育相談、各小中校特別支援教育への指導助言のみならず、毎年数名の幼児の言語訓練をしている。

これが可能なのは、かつて「ことばの教室」の担当として、現ＯＢ会の皆さんからご指導を仰いだり研修を重ねたからである。

あの頃、障害児教育に携わる者こそ更にプロフェッショナルを目指そうが合言葉であったが、私は、言語聴覚障害教育を担当する諸先輩と研究同人からプロとしての姿を感じたものである。その時に戴いた「ほのぼのとしたヒューマニズム、温かく豊かな表情、センスの良い感性、そして厳しい研修態度」等は今でも私の大切な宝石である。

「出会いの後で」

大館市釈迦内　　松本　チヱ子

「ことば」や「きこえ」の教室では多くの親子との出会いがあった。そしてそれは、出会いがあり、単に別れたというたぐいのものではない。

主として個別に出会い、親子の課題についての多様な実践をしていく中で、それぞれが成長し大きな喜びを共有して別れるという関係であったと思う。すべてではないにしろ多くの子供達との別れは、何とも言えない成就感に満ちた嬉しいものなのであった。

そして今、そんな別れの後の余韻を大人になった彼ら（家族も・・・）との交流の中で味わっている。幸せなことだと心から思う。

雑　　感

秋田市 山王　　嵯峨　裕子

今朝の雷といいこのところの天候はひどいもので、子供たちが収穫した落花生も冷たい雨にさらされてしまいましたが、今、窓外の桜の紅葉が、そして少し向こうの森山が淡い夕焼け色に映えてきました。忙しい毎日にあっては、ふと目にする自然のゆったりした景色が心を和らげてくれます。

男鹿の海で開かれた親子合宿も、自然環境の中でゆったりと子どものことを語ろう、まずお母さん元気を出して、という趣旨であったように思い出します。

それにしても、この合宿が今なお続き、たくさんのお母さん、子ども、先生たちのきずなとなっていることを聞き及び、現担当者の方々の誠意溢れる活動に頭の下がる思いがします。
本校の6年生、今日は中学校の人権集会に参加して、共に人権って何だろうと考えてきたようです。ことばの教室を原点としているせいでしょうか、学校教育目標の一つは「自分も友だちも大切にできる子ども」です。

自信と時間と自由を

本荘市笹道　　柏原　美代子

私が本荘市立鶴舞小学校で、きこえ・ことばの教室を担当したのは、昭和61年から5年間でした。当時印象に残っている出来事は、全難言秋田大会の開催です。事務局長であった遠藤昌夫先生の陣頭指揮のもと、県内の言語・難聴教室の担当者が一丸となって準備を行い開催することができました。通級・巡回指導の制度化など五項目の宣言を採択したこの大会は、その後の「通級制の確立」に向かうための大きな礎となった大会でもありました。
また、その大会二日目の分科会の中で、母と子の教室の南村洋子先生がお話されたことは、今でも私の心に深く残っています。
「子ども達への支援で大切にしなければならないことに自信と時間と自由があります。子どもに自信を与え、子どもが自由に動ける環境、自由に考えられることを用意し、子どもが自分で考えられる時間をもたせてあげることが大切です。」
障害のあるなしにかかわらず、全ての子どもにとって大切な事ではないかと、改めて考えさせられている今日この頃です。

今後もよろしく

秋田市立明徳小学校　　石川　　勲

教頭7年目（旭南3年目、明徳4年）となりました。現在、千秋公園の一角という恵まれた環境の下で充実した日々を送っています。
つい先日東北地区小中学校教頭会研究大会秋田大会が秋田市を会場に開催されました。開催の主管は秋田市教頭会です。私は秋田市の幹事長をしておりますので、中心になって計画、準備を進めてきました。
成功のうちに終了しほっとしているところです。
現在、直接障害児教育に携わっていませんが、過去に担当した者が教頭会の運営の中心になっていることは、障害児教育の啓蒙、充実に役立つのではないかと考えています。

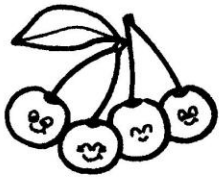
担当したのは30代前半の4年間だけでしたが、私が今あるのはその当時の経験のおかげと感謝しております。
今後もなんらかの形で障害児教育に携わることができればと考えていますので、よろしくお願いいたします。

☆事務局からのご連絡

① この度は、県聴言研30周年記念にちなんで、教室開設時の回想記の寄稿をまとめてみました。ご寄稿有り難うございました。同じく、メモリアルホールへのご寄稿も戴き、ご協力に感謝しております。
② 11月22日、30周年記念式典の会場におきまして、伊藤ＯＢ会会長から鈴木県聴覚・言語障害教育研究会長へ「30周年記念事業支援費」として50、000円(特別会計から)手渡されております。
③ 平成15年1月11日(土)に、平成14年度の役員会を秋田市のイヤタカで開催する予定です。
　ⅰ会務報告　ⅱ予算執行の報告 ⅲ平成15年度の活動方針などを話し合いたいと思っています。何かＯＢ会にご意見ご要望がありましたら最寄りの役員へご連絡下さい。
④ もし会費未納のかたがいらっしゃいましたら出費のかさむ折り誠に恐縮でございますが宜しく納入下さいますようお願いいたします。会費は2000円になっています。振替用紙にておねがいします。
⑤ 会報第5号は、平成15年2月中旬頃、発行の予定です

【編集後記】
初冬の季節ともなり寒さも一段と厳しくなって参りました。
街にはクリスマス商品が溢れジングルベルが鳴り響いています。
師走のせわしさの中に華やかさもあり、一方、なんとなくもの悲しさも含まれている月であります。
回想記、メモリアル寄稿、本当にありがとうございました。なかには写真付きの私信なども頂戴して感激ひとしおです。ご寄稿、私信を戴く度昔、「教室」で起こった諸々の思い出が次々と脳裏をかすめてまいります。
私にとりましては、この会報を発行したことで大変充実した年でありました。会員の皆様に心から感謝申し上げます。
来年もよろしくご協力の程お願いいたします。
いく年来る年、皆様ご健康で。来年も良い年でありますよう願いつつ筆を置きます。

《文責　山田》



秋田県聴覚・言語障害
教育研究会ＯＢ会会報
第5号「たんたん」
平成 15年 2月 発行
「命名者」ＯＢ会元事務
局長 遠藤昌男先生
「書」秋田県ことばを育てる
親の会会長 辻久視先生

【挨拶】

「よりよい充実・躍進をめざして」

秋田県聴覚・言語障害教育研究会ＯＢ会
会長 伊藤 薫

教育改革元年といわれた14年度は、ＯＢ会にとって、これまでにない充実した年であり、皆さんのご協力に感謝すると共に、これまでを振り返ってみたいと思います。

第1は、事務局の組織体制であります。従来と異なり、「北・中央・南ブロック」が、「ことばを育てる親の会」とセットで担当することでした。

その一番手としてスタートした北ブロックは、実にチームワークよろしく、山田先生の全力投球のもとに、佐藤・高橋の両スタッフのご尽力で見事に事務局としての責務を果たしてくれ、心から敬意を表します。

第2に、会報「潭 潭」の編集内容の斬新さであります。特に「メモリアルホール」に寄せられた会員の一言一句からは往時を追想するくだりがいたるところに見られ、現職の会員にこの道の何たるかを論されたのではないかと思っています。

第3は、30周年記念事業への財政支援ができたことであります。本会は皆さんからの会費で運用されているだけに、決して豊かな財政状態ではありません。それにもかかわらず、財政支援ができたのは「親の会の事業」に講師として参画されたＯＢ会のご理解とご協力があってのことであり、心から感謝を申し上げます。

一方、この機会に申し上げたいことは次の点についてであります。

第1、会員の増員策であります。「数は力なり」と申されておりますように一人でも多くの同志を仲間に、声をかけてほしいものと思っています。

第2、会則の検討です。会の運用は会則によって動いているわけですが、発足以来7～8年も過ぎますと、現状とマッチしないことも多々みえてきます。本ＯＢ会が名実ともに機能が発揮できますよう文言の見直しをお願いします。

第3、県聴言研や親の会への協力(支援)の在り方についてであります。

教育は時代背景を無視しては成り立ちませんし、効果もあまり期待できないと思います。いまや特殊教育そのものが「ノーマライゼーションの理念」を実現しようという方向で動いているだけに聴言教育においては、「今、何が必要でどんなかかわり方が望まれているのか」を問いただし、そのための取り組みが大事ではないかと思います。

以上、本年度を振り返り、来年度へ向けての要望を列記しましたが、15年度は、中央ブロックが事務担当となるようですのでよろしくお願い申し上げます。

最後にこの1年間、ち密な計画のもとに充実した推進役を果たした北ブロックの皆さんに重ねてお礼を申し上げ挨拶といたします。

エールをおねがい！

秋田県聴覚・言語障害教育研究会ＯＢ会
副会長 梅田 信彦

大学に入って間もない頃、先輩に連れられて教官室を訪問した時です。まだ若かったその先生は、「大学に何をしに来たのか」と尋ねられました。戸惑っていると笑いながら、「教員免許を取りに来たのか」と言ってから、「大学は、物事を知ること、研究するためのメソッド《method》(方法論)を身につけるところだ」と教えてくださいました。

言語障害の指導は、いわゆる「授業」ではありませんから、その基礎には「研究」が不可欠です。現在教室を担当されている先生お一人お一人が若い頃に学んだ「研究の方法」を思い起こして、自分なりの指導法を確立していくことはやはり必要なことだと思うのです。

ＯＢ会の存在理由の一つとして、こうした「研究」への協力は意味のあることです。

私はこれまで、現役の先生方の前で、恥ずかしながら講義めいたことをしてまいりましたが、出来れば「講義」ではなしに、指導法の研究、指導の方法論確立を目指した方向で役に立てればと考えています。

「言語障害」の子どもは何故か依然として「出現」しています。社会的要請からすれば指導は必須な状況は続いています。

指導に当たられる先生への研修(研究)に対する公的配慮は急には改善しないというのが実情であれば、担当する先生方が独りで悩む余りに、この教育に嫌気がさす事態を避けるためにも、ＯＢ会が役に立てたらと思うのです。

ＯＢ会会員の皆様の一層のご支援をお願いいたします。

現職の先生方へ、エールを送ろうではありませんか。ささやかな、年に、２千円のエールです。　　新年もよろしくお願いします。

事務局の当たり年！？

ＯＢ会事務局長　　高　橋　かすみ

4月の総会でお話を伺ったときはやはり驚きました。今年は親の会事務局も当番ということでしたし、「事務局の当たり年！？」というわけです。
能代市の強みとしては、聴言研の創成期から携わってこられた山田芳男先生、梅田信彦先生、塚本寿之先生をはじめ、納谷宜直先生、現親の会事務局の佐藤昌子先生などがおいでになるということです。
今年度は、30周年記念式典もあり、例年とは違うということで、ＯＢ会運営委員になられた山田芳男先生が、「私と梅田先生とで、30周年を記念して遠藤先生から引き継いだ会報『タンタン』(新聞記者の少年が愛犬と強きをくじき弱気を助ける冒険物語？！→【NHK、BS2放送タンタンの冒険】)を是非今年度らしく立ちあげたいと思っているのよ。何も心配するなっ！！」とおっしゃってくださいました。両先生の熱気に押されて能代に戻ったもののＯＢ会について、何も分からず、会報第1号で『潭　潭』の意味から学習させていただいた、本当に至らない事務局でありました。
何とか、ここまでこぎつけたのも、編集長の山田先生と諸先生方のお力と、汗を拭っているところです。
ＯＢ会員の先生方からは、お忙しいところ、会費納入や豊かな経験が一杯詰まった原稿をいただきましたことを感謝いたします。お力添えどうもありがとうございました。
最後になりますが、本校で印刷を一手に引き受けて下さいました山谷鈴子さんには、親の会と2つのお仕事を「いつでも持って来ていいよ。」と優しくお世話していただきました。「頑張ろうね。」と励ましてくださった校長先生、教頭先生、昌子先生など二小の先生方には、懇親会でたくさんお酒をつぎたいと思います。

【報告】　ＯＢ会役員会開催概要報告

平成15年1月11日秋田市イヤタカに於いてＯＢ会役員会を開催いたしました。その概要を報告いたします。
(1) 平成14年度、会務報告 同じく 会計報告(いずれも中間報告)
(2) 平成15年度事業計画(案)　※(1)(2)は総会で報告します。
(3) 話し合われた内容
① 毎年OB会総会の日に ⅰOB会 ⅱ親の会 ⅲ言語障害推進協議会 ⅳ聴覚・言語障害教育研究会の4つの会が持たれるが、参加したくても参加できない会員がいる。検討を要する。
② OB会会員の中から研修会の講師を出しているが、今後は現場の先生方の中から講師を出すことを考えたほうがよい

③ OB会会報は今後も発行できる態勢にしてほしい。
④ 通信費の不足分は予備費から補填する。
⑤ 会則に不備な点があるので、来年度会則の改正をする。
⑥ 慶弔費、旅費なども考えておかなければならない。
⑦ 平成15年度の事務局は、中央ブロックが担当する。

OB会 メモリアルホール

人生の師

秋田市　　児玉 文彦

特殊学級担任の先生は、今日から預かる子供たちの顔を笑顔で見つめながら、この子はどんな生育歴を送ってきたのかな、日々の生活をできるだけ普通の人々に近付けていくにはどうすればよいか思い悩んでおりました。

そして、生涯よりよく生きていくためには、どのようなことができればよいのか、生活の向上を図るために、正しく自己決定ができる判断力を身に付けさせるためには、どうしたらよいか仲間と真剣に話し合っておりました。

今、彼らが成人になり、様々な世の中の荒波にもまれながら、老いて自分の人生を振り返り、「先生ありがとう。おかげで私は思い残すことがありません。」といってくれていると思います。

そのためには、あなた自身が、あの子らの人生に関わってよかったと思える人生を送れるように努めるべきです。なにしろ、その子にとって生涯の心のよりどころであり、人生の師であるのだから・・・ 感 謝 !

一通の手紙から

能代市　　納谷 宜直

カレンダーが12月を告げた頃、一通の手紙が届きました。それは、もう10年も前に通級していた女の子からのものでした。

中学校、高校、そして就職と、とても忙しかったこと。その間に様々なつらい思いや悲しい体験をしたこと。今はそれらを克服して、パソコン教室に通いながら再就職を目指していることなどが、書き連ねてありました。

時期を同じくして、この原稿依頼が届き、またテレビニュースでは「淳二小ことばの教室」でのクリスマス会の様子が紹介されていました。

年末年始は、特総研で知り合った全国の仲間からの便りが楽しみな季節でもあります。

●フキノトウ

使おう！「明元素言葉」（めいげんそことば）

大館市　　河田 美智子

年末に家族で温泉旅行へ行った時のことです。楽しみにしていた夕食のバイキングが変更になり食いしんぼう親子は少々がっかりしていたところに、ホテルの主任さんがきて、名刺を差し出し、変更の内容を説明しました。その丁寧な対応と爽やかな笑顔に不満な気持ちもいつしか消えていました。ふと目にした名刺の後に、☺ ニコニコマークと大いに使おう「明元素言葉」、ありがとう、すばらしい、やさしい、えらい、りっぱだ、幸福などぎっしり書かれていました。あの主任さんの前向きな姿勢はこれだったのか～と納得の一文字でした。

現在、幼稚園の５歳児 を担当している私は整骨院通いをしながら、我を忘れて子供達と走り回っている毎日です。もっともっと明元素言葉を使って楽しく過ごしたいと思っています。そして、家族、友人、同僚へも☺ マークを胸につけて接していこうと改心した癒しの旅となりました。バイキングなしはちょっぴり、残念だったけれども・・・・

聴言研との出会い

秋田市　　千葉　　昭

平成11年5月の総会が聴言研との出会いの始めでした。辻言障協会長や親の会の方々、山田・梅田・遠藤等各先生方はじめ聴言研歴代の会長やＯＢ会の皆様、そして現職で活躍されている会員が一丸となって「子供達のために」を合言葉に教育活動に情熱を傾けておられる姿を目の当たりにして、深い感銘を受けたことを今でも忘れられません。

この年の夏、県北の鷹巣小と藤里館を会場に開催された県大会は、多彩な講師の方々の熱気あふれる講演や講義など、その新鮮さと内容の濃さに感服させられました。

また、分科会では、理論と実践に裏付けられた具体的な指導や助言に、参会者が一様に満足されていたのが夜の懇親会の盛り上がりによく表れていました。このような充実した研究会が会を重ねて創立30周年の節目を迎えた祝賀会に参加でき喜びにたえません。

本研究会の役割を再認識し期待に応えるため新たなスタートの年にしたいものです。

忘れられないあの言葉

尾崎小学校　　佐藤 由紀子

ある会で長沢泰子先生と話していた時のこと、折しもＳＴの国家資格が話題の頃でした。

「あなた、ＳＴとことばの教室の先生の違いはどこにあるのか言ってごらんなさい！」
「え？」思いがけない質問にあたふた,答えに窮しました。「ＳＴは治療が目的で、私達の仕事は教育で・・・」としどろもどろの答えも「それじゃ答えにならない！」。尋ねられるままに、言葉の指導に直接結び付くわけではないが通級してくる子供が学級でどんな勉強をしているのか知りたくて、当該学年の教科書を覗いてみることにしていると話した時に、長沢先生が「「それよ！」「私達は言葉の指導をしているが、言葉だけを見るのではなく、子供を見詰めなさい。その子供がどんなことで困っているかを見詰め、困難に立ち向かえる力を育てるのが教育でしょ。」
ことばの教室を担当してすでに数年を経過していました。こんな大事なことを考えもせずに今まで"指導"というおこがましいことをしていたのか、と恥ずかしい汗が顔面を滝のように流れたのを思い出します。

事務局ができたことに感謝して

秋田市立中通小学校　　伊藤　正敏

私の教職の最初は、埼玉県の養護学校です。大学で特殊教育を専攻していなかったので、無免許運転でした。4年後秋田に帰り、土崎小学校に勤務しました。はじめて聞く「ことばの教室」を担任することになりましたが、長男の誕生と重なりとまどう毎日が続き、3年経験したら普通学級を希望しようと思っていました。しかし、とうとう今日まで、土崎小で7年、中通小で7年の14年。この間、平成5年から6年間「聴言研」、平成8年から現在まで「言障協」、平成10年から3年間「県特研」の事務局をさせていただきました。私は事務局の仕事を通して本当にたくさんの方々からご指導をいただきました。貴重な財産としてこれからも大切にしていきたいと思います。現在、情緒障害学級を担当して3年。中通小学校も10年になりました。そろそろ「OB会」から「聴言研」会員にもどるのかなと思っているところです。

【編集後記】　　《～会報の編集を担当して～　山田芳男》
会報第5号をお届けいたします
この1年間、OB会事務局をお引き受け下さいました淳二小の先生方には、会報の印刷から発送にいたるまで、多大なお力添えを戴きました。校長先生をはじめ職員の皆様に心から厚くお礼申し上げます。
次に、これまで玉稿をお寄せ戴きました会員各位に、心から感謝申し上げます。各人の心象風景が味わい深い筆致で語られておりまして、読む人に深い感銘を与えたことと思います。これをもちまして平成14年度会報「たんたん」の編集を終わらせていただきます。ご協力ありがとうございました。各位のご健勝とご活躍を祈ります。では皆様ご機嫌よう！